十一面観音菩薩(三の二) (サンスクリット語：Ekadasamuhka)

この像は、収蔵品の他の十一面観音像と同様、最初の一面とその上部に他の十面が突き出ています。この像は、胴体のラインについた多くの折り目があり、薄くてドレープピングしたローブが見事に表現されているのが特徴です。この像の十一個の頭は最高位に位置し、悟りの十一番目の最終段階である仏陀としての境地を表しています。本像の右手は願い事の成就を意味する印相(象徴的な手の身振り)で下がり、左手は蓮の入った花瓶を支えています。

本像は檜材から彫られおり、高さ 498cm です。像の左の上腕の裏で発見された銘刻は彫像が 1069 年までさかのぼることを示しています。当時の大作をここまで正確に年代特定できることは稀なため、美術史家はこの作品をとりわけ貴重なものと考えています。